異なる対象人物への視線の向け方について

飯 塚 一 裕(障害児教育講座)

要約 本研究では異なる対象人物(恋人,異性の友人,同性の友人,親,見知らぬ他人)に対する視線の向け方に ついての自由記述を求め、それをテキストマイニングの手法によって質的に検討した。その結果、対象人物は 親しい関係(恋人,異性の友人,同性の友人)と見知らぬ他人と親の3つに分類されていた。また、知ってい る人か見知らぬ人かで視線の向け方が大きく分かれていることがうかがえた。

キーワード: 視線の向け方、テキストマイニング、関係

1. 問題と目的

あるアスペルガー症候群の方はその自著で以下のように述べている。「なぜ僕が眼を見て話を聞かないのか。みんなにとってその理由は簡単だった – あの子は悪い子だから。…中略…今でも僕は話すときに、視覚的なことで気が散りやすい。幼い頃は、何かに目が奪われるとびたりと話すのをやめた。大人になってからは、まったく黙ってしまうことは滅多にないが、それでも何かに目が行くと話に間を置いてしまうことがある。だから僕は誰かと話すときには、たいてい特定な物ではなく空間を見るようにしている。…中略…アスペルガー症候群の僕たちは眼を見て話すのが、単に心地悪いのだ。相手の眼玉をじっと見ることがなぜ正常だと思われているのか、僕には全然理解できない。」(ジョン・エルダー・ロビソン著「眼を見なさい!」より)

自閉症スペクトラム障害の診断基準の一つに「社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害」があり、彼らには「他者と交流に用いられる言葉を介さないコミュニケーションの障害」があるとされる(DSM-V, 2013)。自閉症スペクトラム障害における非言語コミュニケーションの困難の中でも、他者への視線の向け方が特徴的である点については、これまで数多くの研究で指摘されてきた。例えば視線をさっとそらすことや、他者からの言葉かけや賞賛に対する応答として視線を合わせないことなど、コミュニケーションの中で視線を合わせることが成立しない点が特徴的であるとされる(別府、2005)。この視線の向け方については、今後も詳細な検討が求められる。

古代ローマの詩人, Ovid (43 B.C.-10 A.D.) は, 何も語らない目 (視線) に声と言葉がある, と述べている (Baron-Choen, 1993)。現代の我々の日常生活においても, 対面する相手によって視線の向け方を変えることがある。例えば, 見知らぬ他人に対しては, まず, 最初にちょっと相手を見てすぐに視線を外すこと

が多い。これは、例えば「私はあなたの存在に気がついていますが、あなたに特別な関心があるわけではありませんよ」ということを示しているのである。このような視線の使い方のことを、Goffman(1963)は、Civil Inattention(儀礼的無関心)と呼んでいる。

従来、視線についての実験的研究は多くなされてき たが、視線についての調査は内外ともに少ない。飯塚 (1994) は友人, 恋人, 先生, 親, 他人などの対象人 物に性, 年齢, 親密度などの要因を組み合わせた状況 を設定し、そのような状況で相手と話している時に相 手をどの程度見るか(ずっと見る、かなり見る、時々 見る、ちょっと見る、全く見ない、どちらともいえな い)という質問によって視線量を検討している。その 結果,全体の関係を通して,人は相手を中程度(時々) 見ることが多いであろうと考えていることが明らかに されている。これは、米国のExline(1972)の結果と 類似の傾向であった。Exline は、人間が社会化の過程 で他者をあまり多く見たり、全く見ないというのは良 くないという規範を身に付けるためにこのような結果 が得られたと考えられる、と述べている。そして見知 らぬ他人ついては評定値が最も低くなっていた。つま り見知らぬ他人はちょっと見るのが適当であると考え られていた。また、最もよく見るのは恋人や友人であ ることが見出されている。

これまでに視線量という量的な観点から視線の向け 方を検討することは行われている(飯塚, 1994)が、 本研究では異なる対象人物に対する視線の向け方につ いての自由記述を求め、それをテキストマイニングの 手法によって質的に検討することを目的とする。

2. 方法

1)調査協力者

女子短期大学の学生80名に調査を依頼し実施した。

2)方法

対象となる学生に対して,「視線の向け方に関する 意識調査」を行い, その中では自由記述(質問「あな

たは、以下の対象にどのような視線の向け方をしますか」)に回答するよう求めた。対象は、恋人、異性の友人、同性の友人、親、見知らぬ他人である。なお回答は無記名である。

質的データ解析はテキストマイニングのソフトウエアである TMStudio3.0 (数理システム)を使用し分析した。テキストマイニングでは、記述された文章を分解し、分解した記述語ひとつひとつを変数とみなし、数量データと同じように扱っている。すなわち、自由記述文から得られたテキスト型データをまず分かち書きし単語(構成要素)に分ける(形態素解析)。例えば、「私は公園に行きました」という自然言語文に形態素解析を実行した場合、「私(名詞)、は(助詞)、公園(名詞)、に(助詞)、行き(動詞)、まし(助動詞)、た(助動詞)」のようになる。さらに互いに依存

関係(係り受け関係)にある文節の組を作り(構文解析)、特徴表現分析や評判分析などを行った。

3. 結果

(1) 単語頻度解析

自由記述文にどういう単語が多く出現しているかを 見るために、単語頻度解析を行った(図1参照)。最 も頻度の多い単語は、「見る」であり、他に「目」、 「話す」、「視線」、「相手」、「話」、「見る+ない(見な い)」などの単語が多く出ていることがわかる。

(2) 評判分析

次に,好意的なイメージで語られている単語,非好 意的なイメージで語られている単語について調べてみ

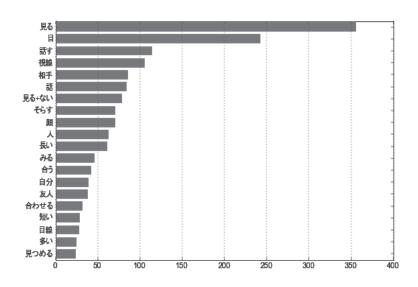


図1. 単語頻度

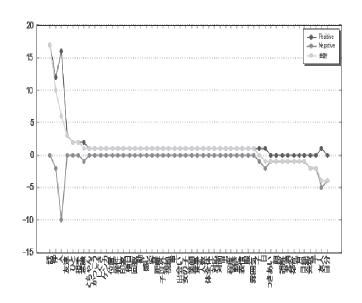


図2. 評判分析

た(評判抽出)。ここでは、単語に対して好意的な表現や非好意的な表現についてそれぞれ語られた回数をカウントし、それをもとに好評語・不評語のランキングを作成した。単語に対して、好意的な表現、否定的な表現、それぞれで語られた回数を数え、それをもとに単語の肯定度、否定度の順位の正負を相殺した値(縦軸)を示し、表はこれの大きい順に並べてある(図2参照)。「話」、「仲」、「人」、「友達」、などが肯定的に使われ、「自分」、「友人」、「手」、「会話」などの単語は否定的な使い方をされている。

(3) 対応分析

対応分析によって、単語による視線と対象の関係を2次元上に配置したのが図3である。なおこの図で、対象人物は異性友人一恋人、異性友人一同性友人などとなっている表記の右側の恋人、同性友人である。「恋人」、「見る」、「目」などは関連が深いので相互に接近している。「他人」は他のすべての対象人物とは離れて位置していることが注目される。図3の左右の区分は、見ない(他人一左側)と見る(恋人、友人等一右側)に相当するようである。

(4)特徵分析

次は、対象別に、特徴的に出現していた単語を抽出した。特徴語抽出では、全体の頻度と属性毎の頻度をもとに抽出指標となる統計量(指標値)を求めることで特徴語が抽出される。まず、恋人は「見つめる、恥ずかしい、長い、相手、そらさない」(図4参照)などであった。異性友人は「友人、同性、話す、人、長い」(図5参照)などであった。同性友人は「話、友

人、仲、会う、外す」(図 6 参照)などであった。親は「話す、親、話、見ない、意識しない」(図 7 参照)などであった。他人は「人、電車、合う、さりげない、見ない、外す」(図 8 参照)などであった。

4. 考察

単語頻度解析によると、すべての対象を合わせて最も頻度の多い単語は、「見る」、「目」、「話す」、「視線」、「相手」、「見ない」などの単語であった。様々な対象人物への視線の向け方についての記述であるため、これらの言葉が上位に来るのは頷ける結果である。

次に、自由記述文に散在している好意的な印象と非好意的な印象を選別するために評判分析を行った。「話」、「仲」、「人」、「友達」などが肯定的に使われ、「自分」、「友人」、「手」、「会話」などの単語は否定的な使い方をされている。

次に、対応分析によると、「他人」は他のすべての対象とは離れた場所に位置していた。また、親しい関係(恋人、異性友人、同性友人)と見知らぬ他人と親の3つに分類されているようであった。これは、飯塚(1994)が視線規範の観点から、様々の対象人物を、親しくない関係、親しい関係、見知らぬ他人、親の4つに分類できたとの報告と類似している。本研究では、知っている人か見知らぬ人かで視線の向け方が大きく分かれていることがうかがえる。

次に、特徴分析から、恋人の特徴語は「見つめる、 恥ずかしい、長い、相手、そらさない」(図4参照) などであった。異性友人の特徴語は「友人、同性、話 す、人、長い」(図5参照)などであった。同性友人

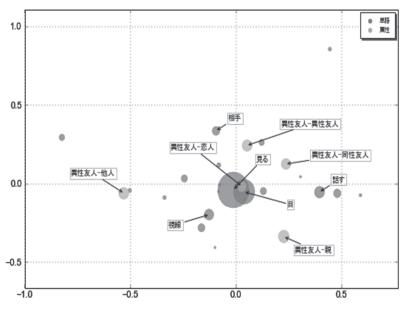


図3. 対応分析

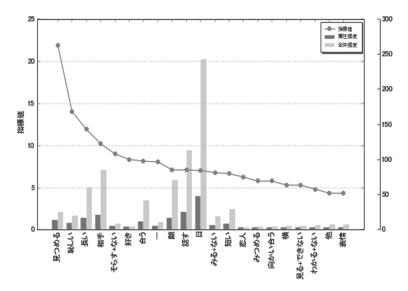


図4. 恋人の特徴語

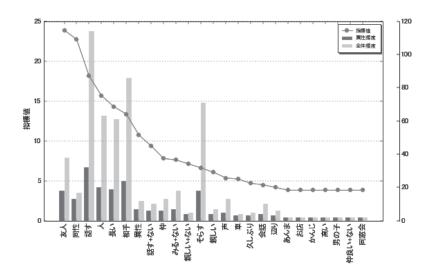


図5. 異性友人の特徴語

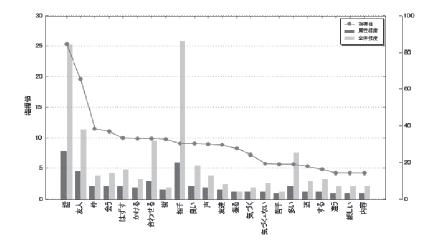


図6. 同性友人の特徴語

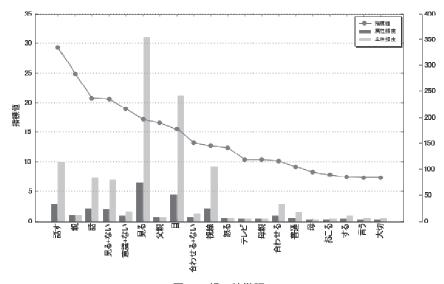


図7. 親の特徴語

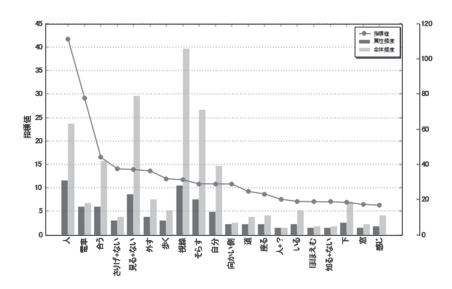


図8. 他人の特徴語

の特徴語は「話,友人,仲,会う,外す」(図6参照)などであった。親の特徴語は「話す,親,話,見ない,意識しない」(図7参照)などであった。他人の特徴語は「人,電車,合う,さりげない,見ない,外す」(図8参照)などであった。

対応分析と同様、この分析結果からも、女子短大生が恋人や友人とは目を見てよく話すが、他人とは視線を合わせないようにしていることが明らかになった。恋人の場合の自由記述には「見るというよりは、じっと長く見つめる。うるんだ質の視線を送る。優しい目で見る。長く見る。好きな人だから、ちゃんと目を見て対話したい。お互い目を合わせたい。たまにじっとみる。その人の目を見て安心して話し続ける。その人と目が合ってもそらさずに話す。かなり長くその人を見ていることが多い。目をじーっと見るが、たまにそ

らしてしまったりする。ちらちら見たりもする。相手が話をしている時は、その間中相手の目をじっと見つ める。自分が話をしている時は、相手の目を見て話したりふと視線を外して遠くのものを見たりを繰り返す。話をする時はきっと恥ずかしくて目を見られない。じっと見るが、恥ずかしさから時々そらすとにう。優しく見ると思う。相手の表情がわかるようにじっと見る。相手の目だけをじっと見る。目をそらさずに話をする。気付いてくれるまで見つめる。久しぶりに会った時、目、顔全体、頭の先から足の先まで見つめる。自分の視線よりも先に視線をそらせた時には、その話題について興味がないらしい事や、返事に困っているらしい事、うるさがっているらしい事などを知る。じっと見てくれる時には話がはずむ。目が合っている時 間が長いのではないかなあと思う。」などがあった。

また, 他人については目を合わせないことも明らか になった。例えば、「電車に乗っている時、前に知ら ない人が座っている。こっちを見てはコソコソ隣の人 と何か話をしているので、よそを見るようなふりをし て、チラッと見て知らないふりをした。電車、バスの 中では自分の周囲をチラッと見まわし服装等を思わず チェックしてしまうが、視線が合った場合はあらぬ方 を見てさりげなく視線を外す。ちらっと顔を見たりす る。目が合うと嫌なのでちらっとしか見ない。目を合 わせない。話しかけられてもちょっと見るくらいだと 思う。一応誰か確認するためにちらっと見てすぐに目 をそらす。ほとんど見ない。たまに目を見る。あまり じろじろ見るのは失礼だから、長い間は見ない。どう いう人か気になるのでちらっと見る。すれ違う時はち らちら見る。ちらっと目をみてすぐそらす。再び見る ことはほとんどない。ちょっと見て終わり。」などの 回答が見られた。

本研究の結果から、女子短大生が一般的に、知っている人か見知らぬ人かで視線の向け方を大きく変えていることがうかがえる。なお、視線行動には性差があることが知られているため、今後は男性被験者についての調査も必要である。

付記)飯塚雄一氏(島根県立大学)には解析処理の段階で多くの助言をいただきました。記して感謝いたします。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (1997) 自閉症とマインド・ブライン ドネス 青土社
- 別府哲(2005)自閉症児の"目"読む目・読まれる 目 遠藤利彦(編) 東京大学出版会 179-199
- Exline, R.V. 1972 Visual interaction: The glances of power and preference. In J.K. Cole (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Goffman, A. 1963 *Behavior in public place*. New York: The Free Press of Glencoe.
- 飯塚雄一 1994 視線の規範について 福山市立女子 短期大学紀要, 20, 125-129
- ジョン・エルダー・ロビソン (2009) 眼を見なさい! 東京書籍
- 数理システム Text Mining Studio 操作マニュアル (v.3.0)